

ばふんっ……と、布団に含まれていた空気が弾けた。ふわりと天乃の髪が浮き上がってほんのり感じる柑橘系の甘いシャンプーの匂いがふわりと広がる。引いた手を握り合わせて、樹はゆっくりと、ベッドに足を上げていく。ベッドの軋む音ですら、空気を壊してしまうのではないかと怯えるような静かな動きに合わせて手が動いて、布団の擦れる音がする。

(……私があっちなのかな、それとも久遠先輩があっちなのかな)

二人だけの吐息、淡い光。夜のほんのり肌寒い空気が胸を躍らせる。ドキドキとする心の動きは、等しく感じられているだろうかと思つめる先の天乃は微かに頬を上気させている。

(久遠先輩があっちだと思ふ)

ドキドキしているのは自分だが、そうさせているのは天乃だ。抵抗せずにベッドに倒れて期待している目に見てわかる赤い頬、キスされることを望んでいるのか唇は緩く結ばれたりほどかれたり……官能的なしぐさの心得などなくとも出来てしまうのだから。

「久遠先輩……」

細く名前を呼ぶ。噛みしめるように、浸るように。そして答えるために動いた唇に唇を重ねる。今日何度目かのキス……僅かに乾いた柔らかい肉感、受け入れてくれる弾力は樹の唇に合わせて歪む。唇の表面の触れ合い、渴きの癒えない今一つの接吻

(良い匂いがある)

ほんのり感じるだけだった甘い匂いは、近づけばより強く感じられる。体の隅々にまで入り込んで、体に淫靡な熱を持たせ始める。あいさつ程度のキスは簡単に性的欲求に火をつけた静かに離れて……見つめ合う。樹はぺろりと唇を舐めて潤し、そのままもう一度キスをする

「んっ……」

「っ……ん」

今度は少しだけ強いいつもの流れ……押し付けるような力での接吻。受け入れてくれる優しさに縋るキスは唇の表面から内側へと広がっていく。呼吸はせずに、ただ、その感触を味わって……離れて弾ける唇、囁くような水の音その心地よさに心がふわりとする。

「っは……ん……」

「ん……」

溜めた分溢れる吐息はまだ薄く、影に覆われた橙色の瞳は十分な潤いに包まれている。一目見てしまうだけで引き込まれていくその輝きを心の中に残す。

「好きです」

(好きです……)

口に出した言葉が心の中に木霊する。好きという想いが広がって温もりに満たされていく体が熱を持つ。艶の戻った天乃の唇を名前に続く言葉と共に、その瞳に映した傍から奪い去る甘い潤いが唇に満ち、無駄に溢れ出てくる唾液が少しだけ天乃に流れて伝っていく。潤った唇は絡み合っ、僅かに外れてびちゃり……ぬちゅり、といやらしい音がする

「っふ……あ……んっ」

「はっ……ふっ……んちゅっ」

啄むだけの早いキスをして、握り合う手を少しずつ上へと持っていく

膝が乗るだけだった樹の体がベッドへと上がり、沈むベッドに体がズレて抱きしめ合うようなキスへと変わる。

(柔らかい……)

唇もそうだが、体も。胸は当然柔らかいんだけど天乃の体自体が、華奢で女の子然としていて抱きしめる温もりが体に交わっていく。

驚きはなく、目を閉じる……深く、広く互いを愛して、唇に空気が触れるよりも長く重ね合う。キスの為に近づけば、天乃の胸が樹の胸に当たる。母乳を蓄える前からも大きく、より膨らみを持った甘美な果実。胸に触れるたびに、ぐにゅ……と押し潰れる感触が伝わってくる。最高品質のクッション、枕。

(もう、胸なんて小さいままでいいかもしれない)

東郷を見てて思う。あの胸の大きさではキスをするのにも一苦労ではないかと。

その点、貧相だと思っていたこの体なら体全体で天乃を感じることが出来る上に、より密接に、濃厚なキスが出来る。幸せだ。女の子としての魅力に欠けるプロポーションを補って有り余る幸福感

「っはふ……んっ」

「はっ……はぁ……んくっ」

下になった天乃の喉に溜まった二人分の淫らな気持ちの流れ込む。

樹は天乃の頭を左手で少しだけ持ち上げると、枕を引っ張って頭の下に敷く。潤んだ瞳、紅潮した頬、潤いきった唇を、寂しげな舌がちろりとなぞる。樹は体の熱を感じて、握る手のぬくもりを感じながら——もう一度唇を重ねた

「んっ……く……」

「っふ……はっ……んっ」

深く、探るようなキス。唇同士が離れるのを拒むように動いて、ぬるりと……滑る

吐息の重なる数センチ、開いた瞳に映る大きな瞳

「まだ……」

「んっ……っぁ」

キスをするたびに、手を握る力が少しだけ強くなる。握って、離れて……強く握ってちょっぴり感じる体の震え、唇だけの厚く熱い抱擁。溶けてしまっような頬の熱、蜃気楼のようにぼやける視界……現実を確かめたくて、唇を重ねる

「んっ……っはっぁ……」

「んちゅ……んっ」

「んっ……あふ……」

離れると糸が引く。容易く切れてしまっような細く薄い繋がりが、切れてしまわないうように追いかけると唇同士が互いを押しつけて、その奥で我慢していた欲求が触れ合う

「んっ……んんっ!」

「っあ……んっ」

唇の奥、何度も姿を見せていた舌と舌の触れ合い。いきなりは怖いだろうと手を差し出すように触れる

「んっ」

「んん……」

ちよつとだけ離れると……天乃から触れてくる。少しずつ、少しずつ

触れる面積を広げて離れる時間を短くして、そのたびにぴちゃり、ぴちゃりと淫らさが弾ける水の音が響き、口元が濡れていく。呼吸の為に離れる距離もだんだんとなくなつて唾液を飲み込むために動いた唇の先同士が掠めるほどに近い

「はっ……はっ……んっ」

「はふ……んくっ」

樹はぐくりと喉を鳴らし、絶えることを知らない欲求を一時的に飲み込む

温まってきた体の熱は、額に汗を浮かび上がらせて、肌を晒したいと求めるけれど、それよりも……と樹は天乃とのキスをする

「んう」

「んっちゅ……っあ」

最初の挨拶、慣れてきた抱擁。それよりも一歩先に進んだ舌と舌の絡み合い。潤いに満ちた中で、ざらりとした感触が舌を撫でる

「っは……んっ」

糸を引きながら離れ、切れる前にまた舌同士のキスをして、握り合っていた手がほどけて……手のひらを合わせたより強い繋がりへと変わる。汗ばんだ手が、欲求の昂りを感じさせる

「っは……」

「……っ……はあ……んっ」

「っ!」

天乃の唇ではなく唇の端に口づけをして、どちらかの唾液に濡れてしまった口元から頬へと流れていく。お清めのソープの匂い、汗の匂い、天乃の匂いそして……樹自身の匂い。色んなものの混じった匂いを肺に取り込みながら、天乃の首筋に舌を這わせる。酸味も甘みもない……けれど、好きだと思ふ魅惑の味が体に広がっていく。

「いつ……んっ!」

「……ちゅ」

左手は空いている。幸い、患者衣を緩めるには右腰側の結びを解くだけで済む

そうすれば天乃の肢体を曝け出させることも出来る。けれど……樹はあえて、天乃の首筋を責めていく。勉強で見た動画では強く吸い付くようなこともしていたけれど、それでは天乃の柔肌に痕が出来てしまう。天乃は魅力的な女の子だ。樹と同じくらいに小さいのに、胸はとても大きくて、男の子の目を惹く。彼らがどういふものなのか、樹にそこまでの知識はな

いけれど、恋人がいないと分かれれば迫っていくのが性だとしたら、自分のものに名前を書くように、天乃が自分の恋人だと示す必要もあるかもしれない。特に、天乃はそれと気づかずに誘惑してしまうから。鎖骨ではなく首筋に……あえて目立つ痕を付けた上で隠させないのもやぶさかではないかもしれないけれど。

(久遠先輩に傷をつけたくない……独占なんて、だめだよね)

汗の滲んだ肌を唇で撫でて、舌を這わせる。数秒間、呼吸もせずに続けて……離れる。ふつと息を吹きかけると、天乃の体がびくんと反応する

「んっ……や……」

「びくびくして……かわいいです」

「いつき……っあっ」

くすぐったさと、気恥ずかしさと、潤沢な愛に浸された舌の心地よさ。キスで燃え上がった体の熱が温められて、吐息が溢れて、声が漏れ……より密接な触れ合いを、下腹部の疼きが訴える。樹の好きという気持ち伝わってくる幸せと、性的欲求が宥められる快感がごちゃ混ぜになっていく。自分が求めているものが、この時ばかりはあやふやになってしまいそうで……瞳に涙が浮かぶ。

「っ……あっ」

「久遠先輩……んっ」

とろけた声で名前を呼び、キスをする。目元を指先でなぞって涙を奪う。それは悲しい涙ではないのかもしれない。けれど、今この時にそれは不要だ。

(もつと、感じてください……)

受け止める力が薄れ、されるがままの弱弱しい唇を奪って、樹は患者衣の襟に親指を引っ掛け、天乃の鎖骨を空気に晒す。

「っふ……」

離れた唇が冷たい空気に触れる。ぼたりぼたりと呑み込み切れなかった潤いが滴るのを感じながら、樹は舌先で唇の表面を舐めると、艶っぽい吐息に膨らむ天乃の胸元を一瞥し、晒した鎖骨へと口づけする

「ひうっ」

「ちゅっ……んっ」

唇のふんわりとした若々しい柔らかさ。情欲に塗れて解れたぬくもりが体に染み込んでいく。揉むように動く唇、その狭間でちろりと舌が肌をかすめ取る

心地いいくすぐったさと体の熱も合わさって、それが性的なものであるかのように錯覚してしまいそうで、天乃は樹の肩に手を当てる

「や……んっ!」

押す力を遥かに上回る力が加わって柔肌に啄まれてしまう

ぬるぬるとした温もりが肌を包み、離れて冷えていく寂しさが広がっていく

くすぐったいののに、気持ちが悪くて受け入れてはいけない気がするのに、やめて。と、言えない。

首筋を舌が這う。樹の唇が舌の足跡を消しながら、感触を刻む

「んっ……あっ……はっ……」

胸に触れられているわけじゃない。下腹部にもまだ手は伸びていない

「っあっ……あ……ふっ……ふーっ」

それなのに、甘い声が漏れてしまう。もっと欲しいと昂ってしまう。自分がどれだけ淫らな女なのか、それを教え込まれているようで、羞恥心がふつつつと体を煮詰めていく。

「い……つき……」

「んっ……まだまだこれからですよ」

意地悪さを感じる笑顔、果てなさを思わせる言葉

けれど、握られた手の力はとても強くて……あまりにも優しい。

抵抗力が薄れていく、委ねたいと愛されたいと……樹に抱かれる心と体が許してしまう

「……ん」

「んっ……っはっ」

軽いキスを一回、すぐに離れて、目と目を合わせる

キスでの無呼吸はしていないのに、一度乱れてしまった呼吸は整うことが出来ないままでもまだ数分。

けれど密着しているような距離感と、度重なるキスに汗ばんだ体はその熱っぽさに色香を増している。

襟首のだけけた患者衣、質素な色合いで色気のないものだけれど……今は気にならない

「んちゅ……」

「あ……う」

「っ……ん……」

また、キスをする。ほんのりと沸き立つ寂しさを払い除けるように、物足りなさを埋めてしまふために、乱れるキスではなく接吻というべき柔らかさと濃密さで覆いながら樹は左手で天乃の肩を撫でてそうっとな脇の方に下ろしていくと、ふっくらとした豊満な乳房を衣の上からなぞる。

(やっぱり、柔らかい……)

キスをしながら、少しずつ感覚を左手へと移していく。

寝るとき用のブラジャーと肌着一枚、その上にかぶさる患者衣の感触に阻まれながらも、乳房の柔らかさは樹の手にしっかりと伝わってくる。母乳の詰まった、母の愛、男が女の象徴と口にする……母性の象徴。痛い思いをさせまいと、揉むのではなく擦り、なぞる。

「んっ……ふぁ……んんっ」

「ん……っはふ……」

キスだけでなく、胸を愛撫すると天乃の反応が少しだけ強くなる。

キスだけの時にはまだ穏やかに感じられていた吐息すら我慢できずに、

樹の口の中に空気が流し込まれていく。

樹はそれを吐き出すことなく飲み込んで、唇と唇の隙間から空気を取り込む

「んっ……っは」

「んう……」

樹の小さな手では覆いつくすことは出来ないが、親指と人差し指を限界まで広げる。

天乃の乳房に手のひらを被せた樹は、親指を固定し、小指から人差し指の流れで……天乃の胸を撫でて刺激する。

「あ……ふ……あっ……んんう！」

「んくっ……っふ……」

慎重に扱わなければと、樹は天乃の唇を舌で割るのを抑えつつ思う。揉みしだきたくなるような豊満さのある胸だけれど、今は母乳が出てしまう上に、天乃の性的な弱点だ

キスをし、胸を撫でてあげると天乃とつながる右手が弱い力で強く握られる
気持ちよくてできているだろうか……できると良いなど、樹は思いつつ乳房への愛撫を続けながら、樹はようやくキスを止めて距離を取る

「やへ……あ……」

「……」

「あふ……う……んっ」

長く深いキスでふやけた天乃の口はおぼつかない。樹の舌の感触、唇への圧迫感
堪えるようにつばを飲み込むと、樹の味が体に満ちていく。

ドキドキと、はじめてしまいそうな音が響く、上下する胸を模る樹の優しさに伝わっている
のではないかと、ただでさえ上気した顔が熱くなっていくのを、天乃は感じる

「はっ……はあっ……あ……」

蒸された吐息が溢れる。樹の想い、自分自身の愛欲混じり合った淫猥な空気が部屋を埋め尽くしていく。まだ、キスだけだと言うのにほんのりと汗ばんだ額に、髪が張り付いているのを感じる。

キスと愛撫……同時に受ける心地よさは、久しぶりの天乃の体には少しばかり刺激が強い。
樹の唇は離れているのに、昂りは収まらずに早まっていく。

同時にされると急激に強まっていく体の熱が怖いのに、手を止められてしまうと中途半端さが切なさを孕む。

もう少し優しくして……そう、言いたいのに。

(……もう少し、欲しい)

樹の優しく繊細な激しさが、欲しくて堪らない。体はすでに火照っている。準備段階など気付かずに飛び越えて、感じ始めたばかりの体は求めてしまう。

「……」

樹は天乃の瞳に切なさが漂い始めたのを感じて、胸に触れていた手を止める

「樹……?」

「大丈夫です」

止めないで。そう、懇願するような声だった。胸に触れていたその手で天乃の頬を支える。樹よりも少し低い体温の、ふにふにとした頬いつまでも触れていられる、ただそれを愛することだけで時間を忘れられそうな……想いが湧き上がってくる。

(好きなんだって、感じる。堪らなく……好きなんだって)

天乃の手を握る力が弱まったのを感じ、樹は声なく微笑んでキスをする

優しく、触れるだけ。さっきまでの淫靡さはない、仕切り直しの合図

「優しくします」

「ん……」

「全部任せてください、久遠先輩」

言葉を交わし、もう一度唇を重ねる。軽く、浅く……すぐに離れたけれど、眼下に見える息の整わない天乃の絶え絶えな表情はどうしようもなく性的だ。

閉じることも開くこともない中間の脛から覗く瞳は、求めたい情欲と、求めるのはという理性に横道へと逸れている。だが、その躊躇いもまた、樹にとっては着火剤でしかない。樹は欲求が強まっていくのを下腹部に感じ、息を飲む。

愛に満ちた唇、ぼんやりと蕩けた瞳、呼吸のたびに揺れる胸の柔らかさに愛おしさが溢れて、好き。という気持ちが行動を支配する。

もう一度、唇を重ねる。頬を撫でながらこっちを向いと誘導し、唇の表面だけを何度も触れ合わせる。一メモリにも満たない距離を置き、ふっと唇の隙間から息を吐いて、キスをする。吐息のたびに唇が渴き、キスするたびにそれ以上に唇が潤う。愛に浸り、心が解けていく。

「ん……」

天乃の脛が開く……求める視線に、樹は何も言わずにキスで応える。唇を上下にずらし、天乃の唇を割って、隠れていた舌にキスをする。

「っあ……は……あっ」

「んちゅ……ちゅ……っあ……む……」

「んんっ」

唇と唇、舌と舌。対等なキスではなく、舌と唇のキス。唇の柔らかさではなく、ぬるりとしつつ、肉感のある一際淫靡な感触が触れる。唇で挟み、ソフトクリームの先端を食すように、にゆる……っつと、削る。二度、三度繰り返して、もう一度啜えた唇の奥で、舌と舌を出会わせる。

「んっ……んんっ!!」

「んぶ……んっ」

卑猥な音が離れる唇から響く。唇を閉ざして、何とか息を飲んだそばからため息を零す。乱れた心のように整わない呼吸のせいか、ぼたりと一粒が天乃の唇に滴って、布団を濡らす。触れ合いから、絡むように……そして、愛し合うキスへと移ろう中で、それでも握っていた手を解く。

「はあ……っ、ふう……んっ」

息を吐き、唾を飲んでまた息を吐く。胸を突き破りそうな高鳴りが体を震わせる。キスをしている時と違って、天乃との距離は少し開いているにもかかわらず、聞こえてしまいそうなほどに大きな鼓動。

天乃のぼんやりと惑う瞳が樹を見る。

(聞こえ、るかな……)

天乃は以前、片方の聴覚を失うなどしていたせいで非常に耳が良い。月明りの差し込むような夜、静まり返った病室の中では心音など容易く聞き取られてしまいそうで……樹はより一層頬を染める。抱き合い、唇を重ね、舌を絡める。そんな大人の領域に踏み込むことをしている、樹の心はまだまだ子供だった。激しくなる胸に手を宛がう。まだ整わない息を無視して、深呼吸。しっかりと開いた瞳に天乃を映す。

「ん……」

「んっ」

触れるだけのキス。始まりであり、挨拶。この数分か、数十分か数秒か。

何度となくしてきた穏やかな接吻をもう一度して、離れた樹は微笑む。

天乃のまだ隠されたバストが樹の胸を触る。ここにある、ここにいる……だから、触れて欲しいと。そう、誘われているようで、樹は右の乳房を手のひらで包む。

「あっ」

小さな声が、目の前の唇から零れる。性的な魅力に溢れた甘美な声。いつまでも聞いていたい、聞いていてはいけない淫靡な音。ただでさえ火照っていた天乃の白い肌が赤く染まっていく。擦るでもなく、ただ触れただけで声を出してしまったことを恥じているのだろうか

(かわいい)

横になった天乃の体に覆いかぶさるようにして、首筋へのキスをする。

自分の匂いを擦りつけるように、自分のそれを調味料だと言うように、唇を使って天乃の首筋を舐める。細やかなざらつきのある下ではなく、ぬるぬるとした唇での感触。くすぐったさと、心地よさにびくびくとした反応が返ってくる。

「んっ……んんっ」

「あむ……にゅっ」

「っ」

少しずつ味わいながら下って行った唇が首元まで届いたのを感じた樹は、唇を舐めてから僅かに覗かせた舌で天乃の鎖骨から顎の裏までを一直線になぞる。

「ひうつ……！」

「んっ……」

びくんつと天乃の体が震えて、かすかな快感の声が天乃の口から洩れだす……まだ、まだ最大限には届いていない。けれど、天乃の体が確かに満たされていっているのを耳に感じる。それがまた、樹の情欲を高めていく。

添えるだけだった手を動かして、天乃の乳房を愛撫する。患者衣の上からでもその豊満さと柔らかさは十分に伝わってくる。

「んっふ……ふあ……あっ」

「……」

「あっんっ……っはっ……はう……」

性的欲求を掻き立てる声。堪えるようにきゅっと閉じた瞼。しっかりと整えられた睫毛が揺れる。声を出すまいと唇が結ばれたかと思えば、開いて……声が出る。可愛い声を聞きたい気持ちと奪ってしまいたい気持ちの両方がふつつつと樹の心に沸く。

「んっ」

樹は顔を上げると、垂らさないように唾を飲んでから唇へのキスに戻る。閉じた唇も、胸を撫でるだけで簡単に開いて樹の唇も舌も侵入を許してしまう。快感にぐちゃぐちゃにされた天乃の口腔は暑く、ねっとり蒸れていて……卑猥だった。キスの最中、籠った吐息の一部が樹に吹き込まれる。天乃の頬が、樹の唇がべたべたになっていく。枕も布団も汗と唾液にシミが出来ていく。

「んっ……あひゅ……あ」

「んく……あ」

快楽に塗れた舌を天乃の口から引き抜く。糸が引き、透明の流れが天乃の中に落ちていく。深く、熱い吐息が重なる。互いを認識できているのかいないのかも分からないような状態のまま唇を触れ合わせると、唇を割って、天乃の舌が触れ合いを求めているかのように樹の唇に触れる。

「んう……ちゅ」

「んっ……んっ……ゅ」

力の抜けていく、受け身な天乃の求愛行動。唇を押し付けて、舌を伸ばし……触れ合い、絡め合う。樹からしていたことを、今度は天乃から行う。息を吸う音ですら卑猥に聞こえるほど、熱烈に。

「ん……っふ……あっ」

「んっ！」

「ちゅ……んちゅ……」

「ちゅる……っ」

唇同士で混じり合い、舌が絡み合い……舌と舌の表面をくっつけてべろりと舐める。それは樹が学習した、遥か先に進んだ大人のキス。

「っふ……はっ……」

「はぁ……ふ……ふ……っ」

樹が体を起こすと、二人の口から艶めかしい空気が病室に溶ける。キスト、愛撫。唇と胸にだけ集中していた神経が全身へと戻ったのだろう、じつとりと汗ばんだ体に肌着と衣の張り付く感覚が今更ながらに伝わってくる。

「暑いですか？」

「……ん」

布団の上にちりばめられた桜色の髪、上気して赤らんだ純白の肌。額に浮かぶ汗に髪が張り付き、頬や首筋に汗の一滴が浮かんでは流れる。まだ残っているはずの清潔な匂いなど、樹の鋭敏な嗅覚からは消えうせ、天乃の汗の匂いだけに満たされていく。

「ん……」

「んっ」

浅くキスをして、天乃の腰の辺りに手を伸ばす。結ばれた紐の一部を引くと微かな抵抗感が戻り……そして、結び目が解けて布団の上へと紐の先端が落ちる。天乃の胸を強調せんとしていた皺が伸びて圧迫感が僅かに緩む。

「……っは……ん」

「ん……っ、ふ……んくっ」

「んっ」

「んむっ……っ」

合わせる程度のキスから離れようとした樹の頭を、天乃の手が抑える。唇を押し付けさせながら舌を覗かせて……樹の唇の中へと忍び込ませる。性的欲求が二人の唇から溢れて、零れて、猥らに弾ける。天乃からのキスが思っていたよりも熱烈で、離れようとした力が失われていくのを感じた樹は、天乃の力と中和させながら、てのひら、手首、ひじ……とだんだん距離を縮める。

「っひゅ……んっ」

「んう……ちゅ……ふ」

唇と唇が合わさって、割り込む空気に引き裂かれれば舌先を繋ぎ、どちらからでもなく引き戻してキスへと戻る。天乃を潰すまいとしていた空間を犠牲にした分、二人の体は密接になり、体の柔らかさも、熱さも……胸の内に秘めているつもりの鼓動でさえ、共有する。

（久遠先輩の音がする……）

恥ずかしいとは思わない。むしろ、嬉しささえこみあげてくるほどに樹は没頭していた。絶え間なく続く天乃の感触、柔らかさの中に芯のある唇、本来のざらざらとした表面を悦楽に浸し、ぬるっとした艶やかさのある舌。接吻と共にふにゅうっと、空気が抜けているのではと思うほどに押し潰れるたわわな乳房。その先端の、気持ち良くなっていることを示すぶくっとした感触。自分のそれが、天乃のそれとぶつかるたびになものにも阻まれることのない快感が、脳への直通回線に迸る。

ふと、腰元が引かれる感触に気付いた時にはもう遅く、樹の患者衣の外巻の結び目は解かれて、紐が天乃のお腹の辺りに垂れる。股下の辺りまでで済んでいた開きが脇腹の方にまで広がっていき、内側の紐と肌着……そして首のあたりまでもが緩やかに露出する。天乃と同じだけ緩んでいても、覆いかぶさっている分、樹の方が早くはだけてしまう。

「ふう……内側も解いちちゃった方が良さそうですね」
少しずつ落ち着いていく心拍数、裏腹に上り詰めていく高揚感。上がり切った体の熱は下がるような様子などなく、落ち着いているはずなのに、まだドキドキと跳ね上がる力強さを感じる。

「そう、ね」

天乃は息を吐きつつ、頷く。表の紐を結んでいるときよりも拘束感はないけれど、ちよつとした動きに引つ張られるような感覚が気を引く。些細なことではあるが、どうせなら全身全霊で埋没したくなってしまう。それが計り知れなく淫猥な考えであると解つても……

「あ、だめですよ」

「えっ？」

「……だめです」

自分の腰の紐をほどこうとした天乃を制し、その手首を掴む。驚きを露わにする天乃に対して、企みを感じる笑みを浮かべる樹は、握った手を天乃の腰から頭の方へと持ち上げていく。流れるように体が下がり、体重のかかっていく腕が布団を沈み込ませる。

一方的に握るだけだった樹は力を緩めて手首から手へと、握る先を移す。

「私がやります」

「んっ……」

ほんの一瞬のキスを唇にして、頬にする。唇の先が触れる程度の間隔だけを開けながら、壁際へと追い詰めるための半歩のように何度も天乃を啄む。キスのたびに押し潰れる唇が震え、心が弾む。

「んっ……ん」

「っ……っ……っ……」

「んちゅぶ——」

キスをしながら、握り合う手を支えにもう一方の手で天乃の腰に触れる。全盛期のような完全な筋肉質ではなく、かといって母親となったばかりの無慈悲な肉体の緩みもない。精霊を除いた勇者部の中で最年少、二番目に小さな樹でさえその両手で抱きしめきることが出来てしまうほどにはスリムな体だ

母とはどのようなものを動画で見た、本で見た。そして、病院であるのを良いことに、子供であることを良いことに、実際に母親となったばかりの大人と話をしたこともある。その誰しもが、妊娠中のふくらみによって多少の余りを感じさせたのだから、天乃の変わらなさはその当人たちからしてみれば羨望など遠く、いっそ妬ましく思えてくるほどだろう。

(それはそれ……これはこれ)

樹はそんなことはどうでもいいと、天乃とのキスに没頭する。言葉が危うくなくても、唇のぷにゅんつとした肉感、ぬりゆりと滑る舌の抱擁。触れるたび、重なるたび……染み出す蜜の味はより豊潤なものとなっていく。樹がキスを止められない理由の一つ。

「んっ……っふ……」

「はっ……はぁ……」

もはやそれが当たり前だと言わんばかりに糸が伸びる。離れたくないと言う心を示すそれを垂らしながら天乃の唇を唇で覆うと、腰に触れているだけだった手を動かして、紐を引く。体を起こし、天乃の体にかかっていた裾を手で払った樹は、思わず高揚感を漏らす。

天乃の体を覆うための患者衣ははだけてベッドの上に広がっており、胸の膨らみを強調するだけの肌着は、へその上にまでずれ込んでいる。

「ひあっ！」

樹はためらうことなく天乃の腹部に手を添える。腰と違って筋肉を感じる硬さがあり、女の子らしい柔らかさも感じさせる下腹部付近を手のひらではなく、指先を使って撫でる。

「っ……ん……」

天乃の声は気持ちが良いと言うよりもくすぐったさが勝っていて、目を閉じると溜まっていた水分が押し出されて涙のように流れていく。プルプルと震える唇、閉じた瞼。それを見て、樹はたまらず顔を近づけた。

「んんっ！」

「んちゅ……ちゅぶ……」

キスをせざるを得なかった。何度合わせても飽き足りない。お腹を愛撫し、唇を重ねて、低く下ろした胸元には柔らかな感触が返ってくる。もう少し下に下げれば天乃の秘境にたどり着く。樹はそれを頭の片隅に止めながら、薬指で天乃の臍の真下を押し込む

「っ……」

「痛いですか？」

「くすぐりたいの……どこで覚えてくるのよ……」

「インターネットです」

人差し指、中指、薬指。使うのはこのたった三本だ。人差し指と薬指で天乃の腹部を押し広げて、中指の腹で擦る。触れ続けるのではなく、断続的に擦って離して擦って離し……また擦る。くすぐったそうな天乃の声は、羞恥にくぐもっている。普段の白さに際立つ朱色の淫靡な色合いに、樹の目は釘付けになってしまう。されど、天乃の体を愛するその手の動きは鈍らない。

(もっと可愛い声を聞きたい。もっと可愛い顔を見たい……もっと、もっと)

天乃の羞恥心が高まれば高まるほど、樹の心は昂った。欲求が際限なく湧き上がっていった。恥ずかしさにかみ砕かれた悶絶の声はただでさえ淫靡な音色に色香を添えられていて、あまりにも妖艶だった。

風と一緒に触れた時とは比べものにならない程、下腹部が疼くのを感じる。まるで、心臓そのものがそこにあるかのような、絶え間ない振動を与えられている感覚は、汗ではない湿り気を滲ませる。

（お腹、熱くなってきた）

元々体温の高くなっていた天乃の腹部は樹の愛撫によってより熱を帯び、解れてきている。筋肉の硬さは少女然とした頼りないものにまで落ちぶれて感じるのがまた、愛おしい。

樹は唇から離れると、その唇の表面も渴かないうちに天乃の肌着の裾を啜えて捲り上げる。手を使わないのは、単なる趣向だ。

「ちよつとだけ、漏れちゃってますね」

肌着の下、寝るとき用のブラジャーの膨らみ、谷間の部分を含め所々が色濃さを増している中、その中でも隆起している先端部分には滲むものがあって、樹は無意識にその部分を口に含んだ。

「んっ！」

さらりとした絹地ごと乳頭を唇で挟んでぐじゅつと染み出してくる母乳を舌で拭い取り飲み込む。天乃の感度の高い声が聞こえ、体が震える。甘さは薄い舌に染み瞬く間に体に溶け込んでいく蠱惑的な味わいに、樹はうっとり……天乃の乳房を見下ろす。邪魔な布を挟んでこれほどなら、直接味わったらどれほど甘美なのだろうか。だが、樹は知っているからこそ邪念を振り払う。その程度の誘惑に負けたら、より味わい深い夜が終わってしまうからだ。

「はぁ……は……優しく、して……ね？」

「……善処します」

胸を上下させ、熱を帯びた吐息と視線。汗ばんだ体は清潔さを損なって、卑猥な匂いに満ちているように感じる。キスをしたい、乳房を愛でたい、下腹部に触れたい……樹の欲求は樹自身の体が叶えられる以上に欲求を膨らませていく。

「勿体ないので、ブラジャーは捲りますね」

「う、うん……」

ブラジャー自体は簡素なもので、値が張る様なものではないがそんなものに天乃の匂いと汗……母乳を奪われるのが何となく嫌だった。そして何より、早く味わいたいという欲求には抗えなかった。

「ひうっ……」

伸びのあるブラジャーは簡単にまくり上げることが出来たけれど、先端が擦れた天乃は体を震わせて小さな悲鳴を上げる。すぐに口を押えたが、その仕草がまた初々しく思えて樹はその手を掴んで、唇を奪う。

やや強引に押し付けるキス、一瞬離れて空気を含み……もう一度キスをする。今度は優しく、柔らかく、舌で唇を割って怯んだ舌に絡みつく。ねっとり空気、押し殺された声を樹は奪う。奪って飲み込み、吸って吐いて天乃の感覚を狂わせていく。

「んっ……んんっ」

「んちゅっ……っふ……」

「んう……あっ……んん！」

「んっ……は……んにゅ……」

天乃の体が何度も震える。まだ、性的感度が達したわけではない。けれど、下腹部のさらさら、淫猥な滝壺は十分に湿り気を帯びているだろう。だが、樹はキスをする。キスをしながら、腹部と戯れていた手で天乃の下乳の部分を撫でる。

「んっや……んんっ」

「っむ……んんっ……」

「いっ……んんっ！」

形を覚えるように手のひらで包み、小指を肌と密着する乳房との間に差し込んで親指で撫でる。張りのある肌なのに指だけでもむにゅりとした感触と共に手に馴染む。じっとりとした汗が、なぜだかより卑猥に思えてきてしまう。触れるたび、撫でるたび、天乃の舌が動く、体が震える。唇が何かを言おうと動くけれど、樹はそれさえも塞いで、奪う。

「っ……ふ……」

「ん……はっ……はあ……はー……」

天乃の左右の乳房を同様に愛撫する間、呼吸をするほんのわずかな時間しか離れることがなかった唇を離す。大きく息を吐いた天乃は瞳に涙を浮かべていて、口元が緩く……艶に汚れている。大きく膨らんでは戻っていく胸の動きは早く、その勢いに押されてか天乃の乳房には乳白色の薄い線がいくつか流れていて、樹の手にも流れ着く。母親になってまだそんなに時間の経っていない体だからその姿。樹は手についた母乳を躊躇なく舐めると、天乃の乳房に描かれた線を舌でなぞる。

「んっ……い、つき……」

「大丈夫です」

「やめっ……んんっ！」

細く伸びた淫靡な線は最終的に天乃の乳首に辿りつく。赤ちゃんが栄養を求めるそれとは対極的な樹の舌使いは天乃の体に快感を覚えさせようという情欲で神経を犯す。澄み切った白色の乳房のてっぺんにある紅一点はぶっくりと存在を露わにして、吸ってと言わんばかりに母乳を溢れさせている。子供のための栄養素、それがエッチの時にまで出てきているのはなんとふしだらなのかと……樹は零れる母乳を舐めとりきって、天乃の口の中に流し込む。

「っはっ……んんっ……」

「っはふ……」

天乃の口元から流れる白色のそれはどこか、男性のもののように……樹は参考資料の中にそんな汚らわしい行為もあったものだと、首を振る。そんな樹を、天乃の潤んだ瞳がじっと見つめる。

「ばか……」

「すみません」

特別激しくしたわけではないが、天乃の体は樹が思っている以上に敏感なのだろう。隆起している乳頭、肌に浮かぶ多摩の汗、充滿する淫靡な匂いは正直に物語っている。キスしているときに感じた天乃の女としての香りはすでに離れていても感じるほどに強くなっていて、樹は呼吸のたびに、唾を飲まずにはいられなかった。それほどに魅惑的なおいに感じる。

「ふう……」

天乃は息を吐き、枕を支えに体を起こす。袖の部分を押し付けていたせいか、ズルズルと患者衣が滑り落ちる。「もういいわよね？」と、天乃は羽織っているだけのそれを脱いで、ベツド脇の椅子に放ると、胸の上に押し上げられた汗に濡れて色身を増す肌着とブラジャーを指でつまむ。

「もう遅いけど……これもいい？」

「えっ、あの……」

「？」

「私が脱がせてもいいですか？」

ドキドキと早鐘を打つ心臓、暴走してしまわないようにと仕切りなおす数分間、だが、樹にとってその焦らしは起爆剤でしかなく、逸る気持ちを抑えるための提案に天乃の首肯を得られて……安堵する

(ダメって言われたら押し倒すしかなかった……)

可能なら、もう少し着たままのエッチを楽しみたいが、色気を半減させる今の装いなら脱いでしまったほうが良い。着たままのエッチは家に帰ってからに預けだ。肌着を掴み、引き上げる。天乃の乳房が揺れ、髪が襟口に吸いこまれて、ふわりと舞う。体から失われた清潔な匂いと淫靡な匂いの混じり合った特別な空気を受けて、樹は思わず肌着を嗅ぐ。洗濯洗剤など消えうせ、天乃の体の匂いと汗と、エッチな匂いが染みついた肌着。ブラジャーからも染み出ていた匂いも合わさって情欲をそそる。

「ちょ、ちょっと……」

「ブラジャーも取りますね」

天乃の制止の声を払い除けて、ブラジャーを掴む。日常的に使うタイプではなく肌着と同じように引き上げた樹はバンザイをする天乃の肘の辺りでその手を止める

「樹……？」

「すみません」

そのまま……。そう、考えた樹は天乃の声にはっとして、最後まで引き上げて天乃のブラジャーを握る。天乃の手の自由を奪ったうえでの続行は今までにない快感を味わえるかもしれない。しかし、その一片を思い浮かべた樹はそのあまりにも危うい情景に、躊躇った。

ブラジャーを嗅ごうとしたけれど、天乃の手に抑えられて「やめて」と、恥ずかしそうなお願いをされては、手を引くしかない。代わりに……と、樹は両手を天乃に差し出す。

樹は、自分も脱がしてほしいと差し出した手だったが、何も言われなければ抱きしめて欲しいか、抱きしめたいという仕草にも取れるもので、天乃が取る行動とえば、樹の腕の中に体を預けに行くことだった。

「あ……」

汗の匂い、天乃の匂い、女の子の匂い。ただでさえ強い厭らしさが腕の中にすっぽりと収まる。

胸に触れる豊かな実りのむにゅっとした感触、その中に感じる隆起した悦楽の昂り……樹は我慢できず、その小さな体を抱きしめて、臀部を擦る

「っ」

「久遠先輩が悪いんですよ」

「んっ……っ」

丸みを帯びた、天乃のお尻。鍛錬のせいで贅肉はさほど感じられないが、触ってみると、柔らかい。力が入ると硬く、撫でてあげれば間の抜けた声と共に空気が抜けたみたいに柔らかくなる。緊張していると分かる天乃の可愛らしさに、樹は体を離して、ベッドに押し倒す。

「ついからですから、下も脱ぎましょうか」

自分の患者衣を放り、肌着も脱ぎ捨てながら樹は天乃の下半身を覆い隠す邪魔なズボンのゴム紐を緩める。天乃の「待って」という声が聞こえたが、関係はない。誘ってきたのは……いや、樹の我慢の壁を突き崩したのは天乃だ。

「待って、今は……もう少しっ」

「……ダメです」

「んっ」

「っふ……っ」

「ん……っ……」

ズボンを持ち上げる天乃の手を無視して、キスをする。天乃のふっくらとした乳房と、樹の小ぶりの乳房が重なって、その頂点に反り立つ乳頭が絡み合う。押し出される母乳に樹の体が濡れて、滑りが良くなる。ぐいっぐいっつと押し付けるような感覚は次第にゆるりとした卑猥さへと変わっていき、天乃の嬌声は樹の中に消えていく。

天乃の力が緩んだ隙に、下着を下げないよう指を差し入れてズボンを引き下げる。蒸れて、熟れて……女の匂いとなったいやらしい匂いがあたりを広がる。白いショーツは猥らに湿って股の付け根には汗とも蜜ともとれる滴が浮かんでいて、樹は無意識に感嘆の声を漏らした。

肌着もブラジャーもなく、上半身裸の女の子。白魚のような煌びやかな肌を赤裸々に晒し、豊満な乳房を揺らしながら母乳を滴らせて……女の匂いを感じさせる愛おしい人。天乃の姿はただただ……率直に性的だった。情欲を刺激し、快感を欲し、与えたくなる妖艶極まりない卑猥な姿。普段の憧れる姿など影もなく、愛したいと思わせる女としての魅力に満ち満ちている姿。樹は自分の喉が鳴る音を心臓よりも強く感じた

天乃は自分の体がどうしようもなく快感に打ち震えていたのが分かっていて、理性の鎧を剥がれ、自分の性的欲求が充満していく恥ずかしさに耐えられなかったのだろう。魅惑的な乳房を震わせながら、それを隠すことなく顔を隠す。だが、その羞恥心に敗北している姿こそ、性的欲求を強く刺激するものだ。一步誤れば危うい趣向……それを違えるほど、樹の理性が弱くないのが救いだらう。

「……天乃先輩」

樹は限りなく愛おしい声で天乃を呼ぶ。胸を隠さず顔を覆う腕に触れて……もう一度、「天乃先輩」と、声をかける。無理に引きはがさず、呼びかけて力を抜かせる。腕の間から覗く橙色の綺麗な瞳に微笑んで、抱くように体を密着させる。ぼかぼかとした体温、わずかな抵抗力もむなしく押し潰れていく乳房、母乳のぬめりが汗と混じり、こらえきれない湿度の高い吐息が重なる。キスをしたい……そんな欲求を抑え、樹は天乃の耳元で囁く

「綺麗です……かわいいです」

白雪の肌、雪原出来た膨らみの上に伸びる紅色の蕾、無駄の削がれた腰の湾曲、小さいながらしなやかに伸びる手足。美しいと言わざるを得ない容姿をしていながら、その手で顔を隠して恥じらう初心な可愛らしさ。樹は天乃の腕をさすり、指の一本爪の先まで慎重に力を入れて細腕を掴むと持ち上げる。引き上げる力など微塵も必要ないまま右腕を剥がし、左腕を剥がす。天乃の恥ずかしさに逸れた頬に触れ、口元を親指でなぞる。

「あんまり、言わないで」

「口が寂しいので」

「……ん」

樹の言葉で察したのだろう、天乃は樹の視線から逃れるのを止めて向き合い目を閉じる。額にかかる髪を払い、唇を重ねる。唇だけの薄いキス。始まりでも仕切り直しでもなく渴きを潤すだけのキス。数秒間重ねて離れ、樹は自分の唇をべろりと舐める。天乃は樹を見つめて、首の後ろに手を回すと、少しだけ引き寄せる力を籠める。抵抗する必要もない微弱な後押し。キスがしたくて、して欲しい。心合わさるキスは柔らかく重なって、ねじれて絡まり……離れて舌先でキスをする。

ねっとりとした唾液が樹の舌から天乃へと伝い落ちる。艶やかな流れはすぐに飲み込まれていく。唇の重なり、舌の触れ合い。猥らに弾ける水の音……互いの言葉はキスに代わって、折り重なる体の熱が高まっていく。離れば零れる熱を帯びた吐息、糸を引く唇。高揚感に反り立った乳頭は普段のそれとは違って芯を感じる。キスするたび擦れて重なる心地よさに、樹自身も歳不相応な女の匂いを纏い始めていた。

「はふ……んっ」

口元から伝う透明の糸を指ですくい、口腔に残った天乃との契りを飲み込む。天乃の体は天乃自身の汗と零れる母乳、樹の汗にまみれてつやつやとしていて、豊満な乳房はより淫靡に揺れる。天乃のショーツはすっかり濡れそぼって、近づかなくとも淫らな匂いを感じる

「ひ……………」

乳房に触れ、腹部へと指を滑らせる。くすぐったいのか恥ずかしいのか、気持ちが良いのか。ぴくんつと震えた天乃は小さな声を漏らす。樹は「大丈夫ですよ」と優しく声をかけながら最初と同じように、臍の辺りを弄る。手のひらでの接触を控え、指先だけでの愛撫。くすぐったさの勝る行為も、昂った体から発せられるのは甘くふやけた嬌声になる。口に手を当て、押し殺したとしても体の震えは誤魔化せない。

「…………くすぐったいですか？」

「ん……………」

きゅつと瞼を閉じて、かすかに天乃が頷く。その間も、樹の手は腹部を念入りに解していく。天乃のお腹の中には、樹にもあるが……子供を作るための子宮がある。そこにまで届くようにと、念入りに愛撫を続けた樹は、天乃の左の乳首に浮かぶ滴をべろりと舐める。人期は大きく震えた天乃のくぐもった声に、今度は右側に同じことをして天乃の味を体に染み込ませていく。

「同じことを、今からもっと下の方でやります」

「ふえ……………」

人差し指と薬指での押し揉む動き、中指のかすめ取るような遊び。弧を描く薬指と反対に動く人差し指。小指と親指は控え、たった三本の指での少し特殊な触れ方が、肌を通して天乃の脳裏に浮かぶ。「いきなりすると驚くと思って……………」と、笑顔を見せる樹はその手を天乃の腹部から下……陰部の方へと下げていく。ショーツの中に入ると思った手はその上に滑って天乃の両足の付け根、汗と蜜の染みたくぼみで立ち止まる。ぎゅつと押し込まれただけで、くぶつ…………と、卑猥な音が小さく鳴る。

「……………」

人差し指と、薬指。その二本が割れ目をわずかに開かせているのだと、天乃は感覚と腹部の経験から察する。そのあとどうするのか、何をされるのか……頭では理解し、体は期待する。

「待って…………待って……………」

天乃は口ではそう言いつつも、振り払おうとはしなかった。いや、出来なかった。体はもう、十分に準備が整っていて、脳裏に浮かぶ樹の手の動きがどれほどのものかと……欲しがってしまっていた。腹部への愛撫、それさえなければと天乃は息を飲む。黙り込んで天乃を見る樹は手を止めたまま、引くことはない。

「もう、平気……………」

天乃はドキドキと早鐘を打つ期待を抑えるように息を吐いて、促す。樹は天乃の心の準備ができたのかと微笑んで、「優しくします」と告げて、中指を静かに下ろす。

「あ……………」

指で開いた陰唇の最下部を中指の腹でくにゅ…………と押し込む。それに合わせてショーツが引き込まれ、敏感な陰核の表面がかすめとられていく。湿ったショーツはしつこくまとわりつき、天乃の過敏な性的神経を爪弾いて弄ぶ。

「んんうっ！」

押し殺されくぐもった声、ビクンッと震えた体は身を屈めようと樹の体に触れる。じわじわと新鮮な水分が染み込んでいくシヨーツから指を離すと、ぐじゅ……っといやらしさが響く。

「っふ……ふう……はぁ……」

まだ始まったばかり、触れられたばかり……樹の指は押し込んだだけ。それだけでほんの少しとはいえ悶えてしまった天乃の荒い吐息を横目に、樹は薬指と中指を入れ替えてシヨーツごと天乃の恥部を開く。

「っぁー！」

開いては戻し、開いては戻し……恥ずかしい音を立てて天乃の卑猥な入口の存在を強調する。開くと、空気を含んだくぶ……っという音が聞こえて、指で閉じるように挟んであげる。とちゅぶ……っつと、淫猥な香りが溢れる音がする。天乃はそのたびに震えて、声を抑える。それでもこらえきれない嬌声が病室に木霊して……ベッドが軋む。

「久遠先輩」

「んっ……んんっ！」

声をかけ、ガードを取り除いてキスをする。舌を挿入しない唇だけのキス。触れて、啞えこんでもう一度触れさせる。そんなキスを繰り返しながら、樹は指先で天乃の秘境の扉を押し広げていく。薬指と人差し指で広げて、中指で入り口の縁をなぞる。なぞって、最下部へと戻り……また擦る。天乃の敏感な場所には手を付けず、小さな快感を束ねてぶつけていく。

「っ……ふぁっ……んにゅ……」

「んっ……ふはっ……んっ」

天乃の声に食らいつく、キスと下腹部への愛撫を絶え間なく続けて天乃の体と心に快感を染み込ませていく。卑猥な音、甘い声、快感に震える体の上で揺れるたわわな果実……樹は天乃のそんな猥らさだけで自分の体が幸福感に満たされていくのを感じる。

「んっ……っ……んんっ」

また、天乃の体が小さく震える。今度は一回半……シヨーツの湿り気は強くなり、指で摘まむと天乃からあふれ出した厭らしさが滲む。もう耐えられないと、天乃の手が樹の胸を押し返す。快感に弱った力など組み伏せるのは容易だが、樹はあえてその力に従う。

「っは……はっ……はふ……んっ」

「んくっ」

「はぁ……いつ……ふう……はぁ」

樹よりも長く早い呼吸をする天乃は、落ち着く前に息を飲んで樹を見つめる。潤んだ瞳は、樹にとっては愛らしいだけだ。天乃の体が動くと、シーツの擦れる音、ベッドのわずかな軋み、くちゅ……っという卑猥な吐息が漏れる。上半身を起こした天乃は半ばまで膝を立てて枕へと腰を預けると、口を開く。

「樹、あんまり意地悪しないで」

「念入りは止めた方が良いですか？」

「どうにかなりそうよ……」

恥ずかしそうに零し、自分の唇を指先でなぞる。天乃はキスが好きでそれだけは積極的に絡んでいく。それだけでも十分体は昂ることが出来る。だが、それに加えて樹のまだ成長途中の乳房に育ち切った天乃の乳房は圧され、母乳が零れていく乳頭にも樹のそれがぶつかり絡む。そのうえで……回復への執拗な愛撫。それも一番敏感なところだけは避けるという周到さに天乃は小刻みに震え、わずかな絶頂を繰り返して……それでも責められて、また悶える。人一倍敏感な体を持つ天乃にとっては、意地悪でしかなかった。

「そしたら、本番に入りますね」

「え……」

「まだ序盤ですよ」

樹にとって、今までは工程的に言えば前戯の段階だ。もう少し念入りに天乃の体を慣らしたいとは思うが、天乃が我慢できないならば致し方ないと切り替える。「うそでしょ……」と天乃の悲痛な声が聞こえたが、樹は「準備段階です」と苦笑して、天乃のショーツの縁に触れる。ものがものなら中身が透けて見えそうなほどにしけたショーツは、もうお役御免だ。

「待って、脱ぐ……自分でっ」

「ダメです」

「なんっ」

唇を、キスで塞ぐ。天乃のショーツに触れていない左手で天乃の腰を掴み、抱き寄せるキスは熱烈に……深く。唇で唇を押し開き、舌を絡める。押し潰れる乳房の心地よさ、漏れ出てくる母乳の滑らかさ。天乃の体を全身で味わいながら、樹は右手でショーツを下げていく。

「んっ……っふ……」

天乃のか弱い力に押される分、天乃を抱く。その分胸が押しつぶされて耐えられない豊満さが横道に逃げようとして、隆起した乳首がこすれて快感が逆る。上がる声も樹のキスに奪われて、力でも負けて……天乃は抵抗する意味もないと委ねる。キスに応じ抱きしめてくれる温もりに浸る。抵抗しないと分かると、樹はキスをやめて、呼吸の時間を置く。けれど、天乃は半分ほどで樹の唇にキスをする。

「ちゅ……んっ」

「こくっ……っふ……」

散々、キスをされたのだ。唇の感触が消えていくのが寂しくて、所在無さげな舌がもどかしくて、天乃は樹にキスを求める。樹はそれに応じて唇を合わせ舌を絡め、天乃の唾液をすする。呼吸の為に離れても、舌で触れ合い引きあってキスをする。ショーツが下がり、臀部が見えてくるころ、天乃は樹の体に手を回し、体を預けるように傾けて腰を浮かせる。

その時だけはキスを止めて……見つめ合う。天乃の照れくさそうな表情に、樹はたまらず何度目かの恋をする。

「私も脱ぎます」

「……ん」

天乃だけは不公平だと、樹は自分のズボンとショーツを一気に引きずりおろして、ベッドの縁から落とす。天乃の湿ったショーツは酷く卑猥で……淫らな香りに満ちていたが、仕方がなく同じように放る。

天乃の艶やかな肢体を撫でて、手を握る。軽く引いて……引かれて、どちらからともなくキスをして、天乃の体をベッドに倒す。ぼすんつと空気が抜けた枕を潰し、覆いかぶさるようにキスをする。手を握ったまま、天乃の体をベッドに埋め込むように唇を重ね、舌で抱き合う。にゆるりとした感触、熱を帯びた吐息、互いに互いを味わう。体をすり合わせて熱を伝え心を通わせていく。押し合う乳房の温もり、柔らかな肉感。紅一点の蕾からあふれる果汁を樹は時折すすっては、天乃とのキスに持ち運ぶ。

「っふ……あ」

「はあ……」

「んちゅ……んっ」

衣服が消え、産まれたままの姿での抱き合いは比にならない程心地よかった。直接感じる体温、すべすべとしている肌は汗と母乳と淫らな水分にぬるぬるとして滑る。握り合っていた手は肘に進み、二の腕に進み、腰へと至って……抱きしめ合う。

「……久遠先輩」

「ん……好き」

「天乃先輩」

樹は抱きしめる手を緩めると、そのまま天乃の下腹部に触れる。潤い、濡れそぼった陰部。樹でさえ僅かに生え始めようかという陰毛を感じさせない天乃の入り口を、人差し指で撫でると、ビクンつと天乃の体が跳ねる。

「っ……ごめ……」

「大丈夫です」

なぜか謝る天乃にキスをして……もう一度。人差し指から薬指までの三本指で天乃の大切な場所を覆いながら擦る。手のひらではなく指の腹だけで擦り、撫でて……味わう。天乃の口からは小さく吐息が漏れる。少しずつ愛液が滲んで樹の手を汚していく。それでも樹は愛撫を続けて……ほんの少しだけ、中指を沈ませる。

「ひあっ……あっんっ」

「ゆっくりします」

「ん……」

「んっ」

天乃のかすかな首肯に応えるように、キスをする。薬指と人差し指の動きを止めて、天乃の陰唇を開くと、ちゅぶ……っといやらしい音が聞こえて、中指が卑猥な水分に浸っていく。天乃の甘い声を口元で受け止めながら、表面だけをすくうように指を動かす。

ショーツを挟んで行っていたことを、今度は生身に行う。開いた割れ目の縁を中指の側面で擦り、産後とは思えない程狭い入り口を腹で擦る。

「ひあっ……あっ……んんっ！」

天乃の嬌声が零れ、体が弾けて……天乃の性的快楽が溢れていく。樹は天乃から離れると、汚れた手を一瞥し、天乃の卑猥な陰部を見る。呼吸のせいかな焦らしのせいかな、欲しがるように開いては閉じているように見える陰唇は、艶やかで情欲を加熱する。

「はあ……んっ……」

樹の手が離れても、天乃は体を震わせると秘部から淫らな水分を流してしまふ。それほどに、体は限界で、なによりも欲している。荒々しい呼吸、汗で蒸れた体、月明かりさえ遠慮する暗がりの室内には淫靡な空気が充満する。

「もう少し行きますね」

「んっあっ……や、し……」

「わかってます」

まずはキスをして、天乃の体に初めの合図をする。下腹部を三本の指で覆ってからゆっくりと擦って温め……中指の爪の甲で陰核を掠める。乳頭のように反り立った敏感なところへの刺激に、天乃の体がわななく。くぶぶ……と空気と水分を押しつけながら中指が膣口を捉えると、また天乃の体が震えて快感の蜜が湧いてくる。一旦手を離し、恥丘の辺りを撫でる。それだけでも天乃の体には快感が押し寄せているのだろう、かすかに震える天乃は樹の体を求めて手を伸ばし、抱こうとする。

その要求にこたえて体を重ね、天乃の体を抱き……唇を重ねる。舌を使わずに唇だけで折り重なって、潤いと安堵を満たしていく。涙の浮かぶ橙色の瞳はキスをする見えなくなる。少し離れば瞼が開いて、行かないでと……揺らぐ。

「大丈夫ですよ」

キスをする。深く、根強く。唇を押しつぶして、舌を絡めるディープな大人の味わい。それと同時に、恥骨を擦って中指の腹で陰核を撫でるとキスをしているせいで閉じれない口からは何とも言えない声が漏れて、ねっとりとした熱っぽさに満たされる。樹はそのまま、少しだけ手を逸らして陰核を避け、膣口に指先を触れさせる。ぬるぬるとした入口は樹の指にキスをするように動いて少し指先を曲げれば、にゅぶ……と容易に侵入を許してくれる。(……これはもう少しあとかな)

第一関節も半ばというところで挿入をやめ、引き抜いて差し込む。ぬぶ……にゅぶ……と、いやらしい音をさせる天乃の秘部、膣口の奥は僅かばかりでも外以上にぬるぬるとして温かく、口腔のように湿り気を感じさせる。指先での挿入を繰り返すたびに天乃の体は達したように震えて、愛液を溢れさせる。卑猥な音はちゅぶちゅぶと水分を含んで軽快な音へと移ろい、すっかり濡れてしまった樹の指がゆっくりと抜けていく。

樹の指が抜けた陰部は水音を立てながら閉じて、締め出された蜜が細く流れ落ちる。

「はっ……はぁ……はっ……」

「……もう少し」

「ふえ……あっ」

天乃の左足を股で挟み、腰を下ろす。天乃の痴態を目の当たりにして昂った樹の体も十分に潤っていて、天乃の太腿に降り立った陰部からはちゅりといやらしさが零れる。そのまま自分の想いを染み込ませるように腰をスライドさせていく。

「んっ……んっ……」

自分の手で弄る方が楽な動き……けれど、自分ではない天乃の体から得られる感触は筆舌に尽くしがたいほど気分が高揚する。柔らかい太腿はにちゃにちゃと湿って厭らしく、膝の凹凸感が陰唇を掠めていく感覚に樹は思わず求愛の声を吐く。天乃が声を我慢したのではなく、そうせざるを得ないのだと、今更ながらに理解する。我慢を止めたら理性が飛ぶかもしれない。そうなったら、歯止めが利かなくなってしまう。

「久遠先輩……」

「樹……」

ずっと繋がっているのに、切ない声。数分ぶりのキスはとても甘く、心地良い。啄むようにキスをし、離れ……互いの姿を認めて抱く。樹の腰の動きが止まると、天乃は樹が跨る足を優しく動かして、樹は空いている手で天乃の陰部を弄る。厭らしさが増していく、互いの匂い、キスの粘り気がだんだんと強まっていく。互いの声を聞き、吐息を重ね、唇を触れさせて、乳房を合わせる。天乃の足が猥らに汚れ、樹の手が卑猥に濡れて……くちゅりと、にちゅりと、淫猥な音が響く。

「んっ……っあ」

「ひう……あっ」

愛し合う二人の体は、同時に昂りを迎えて、体中を迸る悦楽の波に押し流されて力が抜けていく。天乃の体に折り重なるように伏せた樹は、天乃ともう一度キスをして……離れる。一人でするよりも、ずっと強い心地よさ、体で動いていた分の疲れもあって体は鈍いのに、まだまだ欲しいと、天乃に触れたいと、愛したいと体が求めてしまう。

「はあっ……あぁ……」

「んっ……っふ……」

残留していた快感に震えて、二人は手を握り向かい合う。呼吸は荒くまだ落ち着くことのできない昂りを宥めるように、樹は体を摺り寄せて天乃とキスをする。柔らかいキスは終わりの合図……しかし、樹が離れると、天乃が近づいて二度目のキス。

「キス……だけ」

「んっ」

体を抱かないように、手を握り合って……キスをする。舌を伸ばしたい、絡み合いたい、もっと熱烈なキスをしたい。そんな欲求を押し込みながら、唇を重ね、離れては自分たちの姿を認めて、何度目かの「もう一度だけ」を繰り返した。

「……もう少ししたいですけど、駄目ですね」

「そう……ね」

体を重ねるのを止めて、キスを止めて……数分。少しずつ体力は戻りつつあるけれど、これ以上は天乃の体が持たない。樹自身も、してみたいと思っただけで、したことはなかった空想は危ういと欲求を飲み込む。天乃の足に下腹部をすり合わせていた心地よさは自慰の何倍にも及ぶ……なら、二人の陰部のキス、俗にいう貝合わせというものはどれほどなのだろうかと思うけれど、駄目だ。

「樹、ねえ……」

「なんですか？」

「あれで序盤って、嘘よね？」

「本当ですよ。まだまだ前戯のつもりでした」

おっぱいは中途半端だし、お尻も軽く触った程度、指の挿入に至っては第一関節の半分程度でしかない。それに、ディープキスよりもっと卑猥で大人で深い陰唇と唇での接吻も避けた。天乃の体を温めて準備をし、急激な快感にならないよう出来る限り丹念に浸透させていた。あれは、やはり前戯だ

「久遠先輩、えっちなですね」

「……む」

「意地悪しないで……」

「やめてっ」

「えへっ」

可愛かった、えっちなだった。今にも零れそうなほどに涙をためた瞳、懇願するように搾りだされた声。あれで欲情するなどというのは無理な話だし、昂るなどいうのも不可能だ。男の子ではなくてよかったと思ったし、男だったらよかったなとも思ってしまった。道具を持ち合わせていない今、樹が天乃を愛せるのは指の長さの分しかない。その点、男の子なら天乃の体の奥にまで届く、想いを流し込める。そのことに、少しだけ妬いてしまう。

「次は、もっともーっと気持ちよくさせますね」

「もう少し優しいのでお願い」

「道具を用意しようと思ってるんですけど……」

「優しいのでお願いっ」

天乃の真剣な願いに、やっぱ樹は幸せそうに笑う。優しいのは当たり前だ。大切にすることも当たり前、なによりも深く愛していくのも当然だ。後片付けをしてもなお残る性的な香りを肺にため込みながら、窓から流れ混んでくる自然の匂いに目を瞑る。布団の中で、天乃の手が樹の手を握る。それに応えて握り返して……静かに、まどろみの中へと落ちていく。